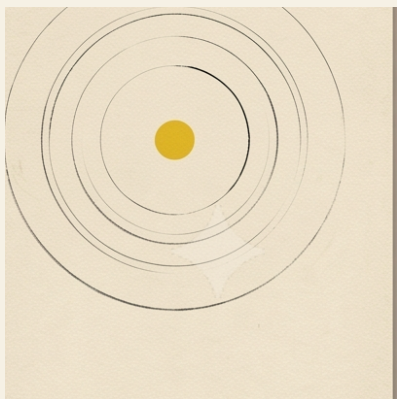


わたしの物語

情景でたどる、
ひとつの人生

神谷
渉三



わたしの物語

情景でたどる、ひとつの人生

神谷 渉三

目次

第一章	牛の鳴く町	3
第二章	デクノボーの詩	7
第三章	山と海のあいだ	11
第四章	東京、三百本の電話	13
第五章	ラーメン屋の灯	17
第六章	息子が生まれた日	21
第七章	海を渡る	25
第八章	水滴、石を穿つ	29
第九章	遺すもの	35

第一章

牛の鳴く町



私は愛知県刈谷市の、少し田舎な町で生まれ育った。どれくらい田舎かというと、家の隣に牛小屋があった。牛たちは日がな一日草を食み、モウモウと鳴いた。悪さをする、祖父母に「そんなことしてると牛に食わせるぞ」と冗談半分に脅されたものである。

近くには岩ヶ池という大きな池があつて、近所の友達とよく遊びに行つた。池の周りを巡るだけで、冒険をしているような気分になれた。森の奥に、竹や植物で秘密基地を組んだ。何度も作り直したその場所は、そこにいるあいだけ、自分たちだけの特別な場所だった。

池の真ん中には蛇島という浮島があった。ある日、池の脇の古い木の船にみんなで乗り込み、大きな竹で底を突きながら島を目指した。ところが沖へ出るほど池は深くなり、やがて竹が届かなくなった。船は転覆し、危うく溺れかけた。いま思い返しても、あれは面白い思い出である。

教室では、後ろの床にごろんと寝転がつて、窓の外の雲を眺めていた。雲がゆっくり流れ、校庭の木の葉が一枚一枚違う緑をしていることに気づいた日のことを、よく覚えていた。教室が狭く感じられて、外の広い空に憧れていたのかもしれない。

いちばんの楽しみは、本だった。毎日のように本屋へ通つては立ち読みをした。駅の近く

の中心街にある大きな店で、選り放題、読み放題のような場所だった。週刊少年ジャンプは毎週のように新しい号を読みに行った。『キン肉マン』も読んだが、心に残っているのは『キャプテン翼』である。ワールドカップを目指して戦う姿に夢中になり、友達と漫画の場面を真似て遊んだ。手塚治虫の『火の鳥』も読んだ。紙の匂いのなかで物語に沈み込む時間は、いまでも懐かしい。

保育園の頃、私のあだ名は「猫」だった。同じクラスの子が、私の使っていたおもちゃを勝手に持っていくた。先に使っていたのは私なのに、一方的に奪われたことが許せなくて、その子をついてしまったのである。大人たちは「暴力はだめだ」と言うばかりで、私の気持ちを分かってくれる人はいなかった。「猫」と呼ばれるのは悔しかったし、その出来事から、周りの友達ともあまり仲良くなれなくなった。それでも、不公平なことはよくない——あのときの直感を、私はいまでも間違いだったと思っていない。

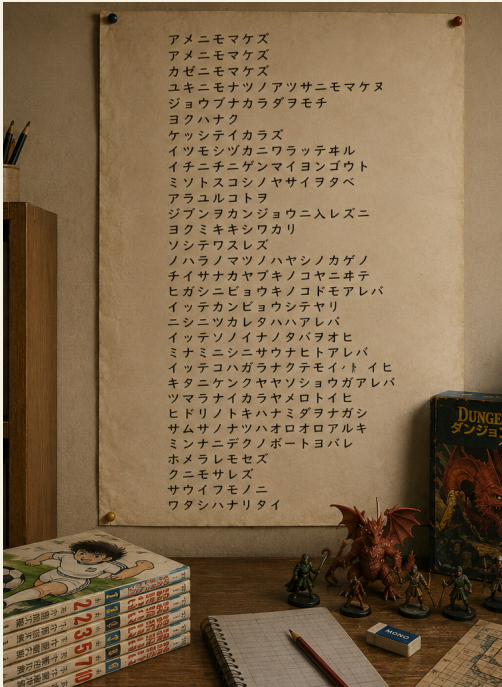
小学校の低学年の頃には、隣の使われなくなった保育園の跡地が遊び場だった。友達と忍び込み、もう使わないのだからいいだろうと、石を投げて窓ガラスを割って遊んだ。それが学校に知れて、呼び出され、こっぴどく叱られた。私は三人兄弟の末っ子で、確かあのとき

兄たちも一緒にいた。叱られた後で兄と「お前のほうがいっぱい割っただろう」「いや、お前のほうだ」と、くだらない言い合いをした。そんなやり取りごと、いまでは懐かしい。

三人兄弟の家は、いつもバタバタしていた。おもちやは少なく、兄たちが先に遊んでしま
うから、自分の番はなかなか回ってこない。もっと自由に遊びたいと思っていた。誕生日だ
からといって特別に祝う家でもなかった。子どもの頃に祝ってもらった記憶は、あまり残っ
ていない。――誕生日の話には続きがあるのだが、それはずっと後の章で書くことにする。

デクノボーの詩

アメニモマケズ
アメニモマケズ
カゼニモマケズ
ユキニモナツノアツサニモマケヌ
ジョウブナカラダヲモチ
ヨクハナク
ケツシテイカラズ
イツモシツカニワラッテキル
イチニチニゲンマイヨンゴウト
ミソトスコシノヤサイヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
ノハラノマツノハヤシノカゲノ
チイサナカヤブキノコヤニキテ
ヒガシニビョウキノコドモアレバ
イッテカンビョウシテヤリ
ニシニツカレタハハアレバ
イッテソノイナノタバヲオヒ
ミナミニシニサウナヒトアレバ
イッテコハガラナクテモイイト イヒ
キタニケンクヤヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ



小学校三年生のときの担任は、清水先生といった。授業の中身はもう覚えていない。ただある日、先生は私に、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』という詩をくれた。私はその詩が好きになり、ずっと部屋に飾って、いつも読んでいた。

みんなからデクノボーと呼ばれながら、評価されることも偉く思われることも求めず、ただひたむきに人のために尽くす。詩に描かれたその生き方に、子どもの私は深く感銘を受けた。一篇の詩を手渡してくれたこと——それが清水先生から受け取った、いちばん大きな授業だった。

学校には、正直なところ、あまり馴染めなかった。友達はなかなかできず、中学ではひどいいじめに遭った。毎日のように暴力を振るわれ、誰も助けてくれなかった。そのなかで救いになったのは、祖父母、とりわけ祖母の優しさである。祖母の優しさに触れるたび、自分は大事にされている、愛されているのだと感ずることができた。

私の右手にはマスカケ線がある。手のひらを横に貫く一本の線だ。これを持っている自分は特別な存在なのだと自分に言い聞かせて、なんとか心の支えにしていた。

家には卓球台があった。小学生の頃から友達とよく打ち合った。忘れられないのは、カッ

トマンの友達との試合である。攻めても攻めても、粘り強いカットで返されて、どうしても崩せない。あの悔しさを、いまも覚えている。

高校二年のときには、クラス会を開き、実家にクラスの何十人もの仲間を泊まりがけて呼んで大宴会をやった。一日中しゃべり、遊びに出かけ、みんなで鍋を作って食べた。家族のようにゆっくりと過ごせた、あれが子ども時代のいちばんの友情の思い出である。

山と海のあいだ



中学を卒業するとき、私は一人暮らしがしくて、わざわざ遠くの高校を受験した。十五歳の一人暮らしは、初めて自分の足で立った記憶として、強く残っている。

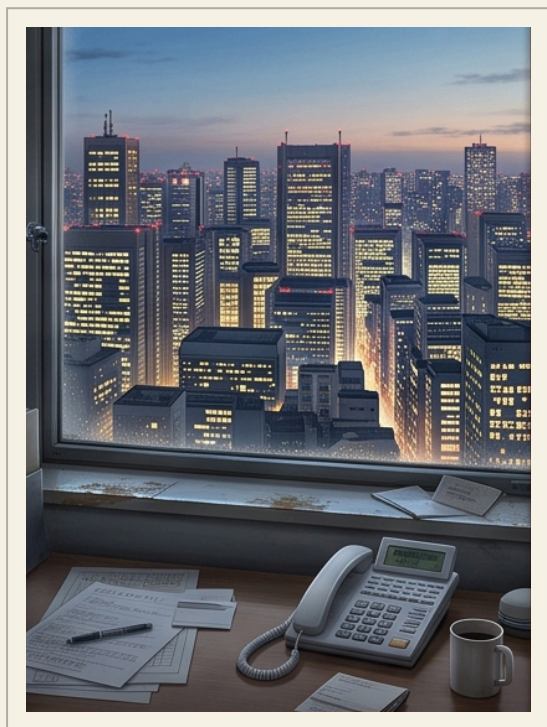
大学は神戸を選んだ。住みたい街だったから、神戸大学を受けた。山と海に挟まれた美しい街で、大学から見下ろす夜景の美しさは、いまでも目に浮かぶ。

大学ではワンダーフォーゲル部に入り、山に登った。二週間山にこもり、雪に穴を掘って眠った。食料が足りず腹が減っても、それがかえって気持ちのよい経験になった。自然のなかで過ごすことが、人間の体にどれほど良いか、身をもって知った。

北アルプスに登ったときのことだ。尾根を登り切った後、仲間とキャンプを張り、カレーを作って食べた。あのカレーが、これまでの人生で食べたいちばん美味いものである。以来、どんな高級料理を食べても、あの感動を超えたことがない。何を食べるかではなく、どんな状態で、誰と食べるか。それがすべてなのだと、あの尾根の上で知り、以来ずっとそう思っている。

成人式のこと、正直あまり覚えていない。スーツを着て地元の式に出たはずだが、大学の部活の仲間とスーツを着た記憶と混ざり合って、もう輪郭がない。

東京、 三百本の電話



就職は、東京のデータ関連の会社に決まった。ところが入社式の直前、私は学生旅行でインドにいた。インドの列車は時刻表があつてないようなもので、帰りの列車が大幅に遅れ、二日で着くはずの道のりが、三日経っても三分の一しか進まない。入社式に間に合わないかもしれない。途方に暮れて、車中で出会った社長さん風の人に相談すると、返ってきたのは「ネパールはいい国だから、寄ってきたらどうだ」だった。国民性の違いに愕然としつつ、私は必死だった。小さな航空会社の飛行機でデリーを経由せずシンガポールへ飛び、乗り継いで、なんとか日本に帰り着いた。

入社式には、間に合った。あのときのドキドキは忘れられない。何事も、最後まであがいてみるものである。社会人生活の初日を前に、私はそれを学んだ。

仕事は、テレビ業界へのテレアポから始まった。三百人ほどのリストを渡され、一件一件電話をかけ、アポが取れた客先を訪ねる。地道な作業の果てに、住友とZとのデータウェアハウスの契約が取れた。自分の手で仕事を生み出した、初めての成功体験だった。

入社三年目くらいの頃、大谷明さんという上司についた。抜群に頭が良く、疑問があればすぐに「なんて」とフラットに問い続ける人で、Zのデータのなかでは珍しいタイプだった

。好き嫌いの分かれるやり方かもしれないが、私は好きだった。大谷さんは上場企業の経営層やCTOとも親しく、おかげで私も、普通の間管理職では会えない人たちと話す機会を得た。のちにLINEの社長になる川邊さんと話し、ヤフーに加わってからの話を聞いたのも、その縁である。新規事業の立ち上げも、失敗後の再建という泥臭い仕事も、大谷さんの下で経験した。

二十六歳のとき、BSデジタル放送のプラットフォームで五十億円の契約をリードした。デジタル放送の開始に伴うトランザクションセンターの構築にも携わった。その後はヤフー・ジヤパンの営業責任者として、六本木ヒルズのヤフーに百人のエンジニアを送り込み、二桁億円の仕事を受注した。あの会社のカルチャーに触れ、スタートアップの精神を肌で感じたことは、大きな学びになった。

三十五歳では、社内のビジネスマネジメント実施方法を統一するプロジェクトに関わった。公共・金融・法人で仕事のやり方がバラバラで、統一は不可能と言われていた。私は品質管理規定に立ち返り、顧客の満足を基準にしたビジネスプロセスを提案した。それが全部署の合意を得て、全社統一の憲法とも言える実施方法ができあがった。私のターニングポイ

ントである。

父のことを、ここに書いておきたい。子どもの頃、私は親にあまり面倒を見てもらえず、寂しい思いをしたこともあった。だが父の死後、母から聞いた。父の教育方針は、何も言わずに、自分で考えて行動できるようにさせることだったという。何も教えられなかったからこそ、ゼロから考えて物事を作る力がついた。父はよく「月から地球を見ろ」と言った。自分がどうかということより、世界がどうなっているかを広い視点で見よ、と。

ラーメン屋の灯



妻と初めて会ったのは、彼女が新入社員として入社してきたときである。歓迎会の席で顔を合わせた。第一印象は——もうだいぶ前のことで細かくは覚えていないのだが、化粧が少し濃かったような気がする。そのことだけを、なぜか覚えている。

当時の私は仕事の相談を受けることが多く、会社の近くの交差点にあるラーメン屋が、その定席だった。彼女ともそこでラーメンをすすりながら、いろいろな相談に乗った。もともと彼女とは長い付き合いで、会社の仲間との旅行やスキーも多かったから、その延長で食事に行き、飲みに行き、気がつけば自然に、私たちは付き合い合っていた。初デートは、それくらい自然な流れのなかで始まった。

三十歳のとき、表参道で結婚式を挙げた。式まで少し時間があつたので、母と二人、近くの明治神宮に参った。母は都会の真ん中の美しい森に驚いて、「すごいね、都会の中にこんなに綺麗な森があるなんて」と植木を眺めていた。よく晴れて、風の心地よい日だった。あの日の母の様子は、尊く、新鮮で、いまでも心に深く残っている。

新婚旅行はモルディブへ行った。海は美しく、二人でゆっくりとした時間を過ごさせて、本当に幸せだった。あの景色は、いまでも鮮明に思い出せる。

愛とは何かと問われたら、私はこう答える。自分のことよりも、相手のことを思うことだ。損得や自分の心地よさよりも、相手の幸せを優先すること。その人が幸せになることが、自分が生きるか死ぬかよりも大切だと思えること。それが愛だと、私は感じている。

息子が生まれた日



結婚した頃、私たちは「子どもがいなくてもいいね」と話していた。三十五歳くらいになって、持つならそろそろ考えたほうがいい、という話になった。最初の子どもがいたら、きつとかわいいだろうね。そう言って、私たちは決めた。

出産には立ち会った。妻は本当に頑張ってくれた。息子が生まれた瞬間、私は感動のなかで、それまでの自分の信念が静かに置き換わるのを感じていた。私は未来志向で世の中を進めることに貢献したくて、世界を進めるのは「だ」と信じて、この業界で働いてきた。だが息子が生まれてから、人類を先に進めるのは子どもたちだと考えるようになった。技術ではなく、人が世界を進めていく。価値観が大きく変わった瞬間だった。

子育ては、予想をはるかに超えて大変だった。夜中に起きてミルクをやる。言葉の通じない相手と向き合う。思うようにいかないことばかりで、それがかえって新鮮だった。毎朝、息子を保育園に連れて行くのは私の役割だったが、朝になると泣き叫んで、まるで行こうとしない日があった。こちらでも会社がある。早く連れて行きたい。それでも、何も言わずにただ待っていると、息子はやがて泣き止み、自分から私のほうへ寄ってきて、腕の中に入ってくれた。急かすのではなく、待つこと。待てば、子どもは自分から来てくれる。あの朝、私

は親としていちばん大事なことを教わった。

料理はあまりしないのだが、誕生日などの特別な日には作ったことがある。じゃがいもを下に敷き、その上に鯛をのせて、電子レンジでふくらと焼き上げる一皿である。これが本当に美味くできて、妻がとても喜んでくれた。その思い出は、いまでも心に残っている。

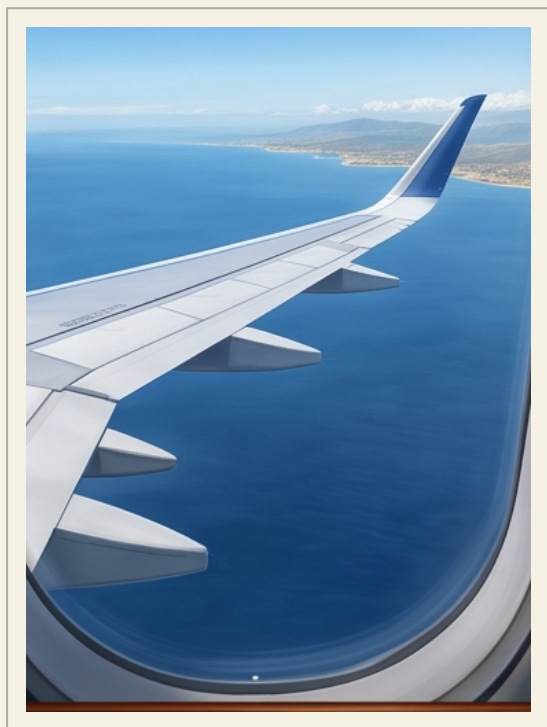
我が家には、家宝と呼びたいものがある。家族が作ってくれるフォトブックだ。一年の出来事をまとめて、月ごとに配ってくれる。家族との思い出が詰まったものほど、大切なものはない。

年末には、親戚一同が集まって餅つきをするのが恒例である。米を持ち寄り、かまどに火を入れ、蒸し上がった米を臼に移して、順番に杵を振る。火の番をする者、餅をつく者、食材を持ってくる者。役割を分け合い、ワイワイと過ごしながら、互いが元氣でいることを確かめ合う。子どもの頃から続けてきたこの行事に、いまでも毎年顔を出している。出来立ての餅は格別である。

大晦日には家族全員で年越しそばを食べ、いとこの子どもたちも一緒に紅白歌合戦を見て、年が変わる瞬間を待つ。それからインドの寺へ行って鐘をつき、神社に参り、帰宅して

妻と乾杯する。翌日はおせち料理を囲む。寿司も一緒に楽しむことが多い。毎年同じ流れを繰り返すからこそ、「ああ、新しい年になったな」「今年も頑張ったな」と実感できる。一年の締めくくりと始まりを教えてくれる、大切な時間である。

海を渡る



四十代後半で、私は起業した。理由ははっきりしている。私は家族のために起業したのである。教育に関わるサービスを立ち上げ、それがきっかけで、長兄の光一とそういう話をする機会が増えた。子どもの頃は怖くて近寄りがたかった兄と、大人になり、互いに家族を持つて、ようやく落ち着いて話せるようになった。きょうだいの関係は、年月とともに確かに変わるのである。

次兄のケンジは、家族のなかでいちばん面白い男だ。働いておらず、いつも実家にいて、まるで家で勤務しているようなものだが、犬の面倒は誰よりもよく見るし、子どもたちにもすごく懐かれていて、一緒に戦いごっこまでやってくれる。憎めない社会人、としか言いようがない。ケンジがいると、実家の空気がどこか安心する。

そのケンジとの、家族がよく話す笑い話がある。子どもの頃、庭のガレージの上に蜂の巣ができていた。ボールを取りに屋根へ登った私は、そこに蜂の巣があるなんて知らない。一緒に登っていた兄が「ほら、手を突っ込んでみる」と言うものだから、何も考えずに突っ込んで、まんまと刺された。ひどく痛かった。「なんてことするんだ」とその場では怒ったが、いまでは家族が集まるたびに出てくる笑い話である。

事業では、シンガポールの友人と協力して、子ども向けの「ワークショップ」を開いたことがある。家族も一緒に行き、息子が運営を手伝ってくれた。他の子どもたちを助けている姿は頼もしかった。空港の荷物カートで遊んでいた姿も、微笑ましく覚えている。

やがて事業はインドへ、そしてアメリカへ広がった。ビザを取り、パロアルトにツーベツドルームの部屋を借りて、インド人のメンバーや日本人の共同創業者と一緒に住んだ。五十歳を超えてからの、スタートアップらしい共同生活。それは驚くほど新鮮な暮らしだった。

思えば、ずいぶんいろんな場所に住んできた。刈谷に生まれ、十五で家を出て、神戸で学び、就職して東京へ。会社の寮から朝霞のワンルームへ、巣鴨、下北沢ときて、結婚して池上へ。子どもが生まれて喜多見に移り、そこから少しずつ東側へ。息子の小学校入学の頃に成城学園前の近くへ、それから祖師谷大蔵へ。いま住んでいる祖師谷大蔵の家は住みやすく、気に入っている。そしてパロアルト。街を移るたびに、人生の章が変わってきた。

何度でも訪れたい場所を挙げるなら、まずは刈谷の実家である。生まれてからの思い出が詰まった故郷は、心が落ち着く特別な場所だ。ケニアのサファリは素晴らしかったし、トルコのイスタンブールも魅力的だった。いまいるパロアルトの美しさも捨てがたい。行きたい

場所は、まだいくらでもある。

家族との旅も重ねてきた。モルデイブの海。息子が働く姿を見せてくれたシンガポール。最近家族で温泉宿に泊まるのも楽しみのひとつで、そこで過ごす時間は心温まるものだった。

そして誕生日の話の続きを、ここに書く。新しいサービスを立ち上げて頑張っていた時期のある誕生日、家族が、そのサービスのロゴをデザインしたケーキを用意してくれたのである。ベースデーソングを歌ってもらい、ろうそくの灯を眺めながら、私は家族に支えられていることを噛みしめていた。家族のために起業した私が、家族に支えられている。子どもの頃に祝われた記憶の薄い誕生日は、この歳になって、いちばん心に残る誕生日になった。

妻の誕生日には、駅の近くの高級レストランで、三人でコース料理を楽しんだことがある。なかでもキャビアのパスタが忘れられない。店の雰囲気も、店員さんの応対も見事だった。いつかまた、あの味を楽しみたいと思っている。

水滴、石を穿つ



アメリカでの事業展開は、人生でいちばんつらい時期になった。誰も資金を出してくれない。アメリカの投資家は、私たちには見向きもしなかった。インドのメンバーとともに挑んだ市場で、計画通りに売上が上がらず、資金が尽きかけた。誰も出してくれないなら、自分の手で稼ぐ。私はそう決意し、大きくレバレッジをかけて投資をした。一時は非常にうまくいき、何十億円もの利益を得た。

そこへ、トランプ政権の関税ショックが来た。市場は崩壊し、状況は一変した。税金の支払いが重なり、全額を失い、自己破産も許されないまま、莫大な借金だけが残った。毎月二千万円を稼いでも借金は減らない。永久に続くかと思われる、借金地獄だった。

それでも、なんとか乗り越えた。税金を払い終え、会社は九か月で立て直して黒字に戻した。この経験で、自分の力で何とかする力がついたと、いまは思っている。五十歳を過ぎてからこんな困難に出会えたことは、結果的に良い経験だった。自己破産が許されるなら、それはそれでラッキーだとさえ考えられるようになった。環境がどう変わろうと、会社を立て直せるという自信がついた。あの試練を、私はいま、誇りに思っている。

座右の銘は「水滴、石を穿つ」である。一滴一滴の水が同じ場所を打ち続ければ、硬い石

にも穴が開く。新しいアイデアを考えるのは楽しい。企画書や提案書を書いているときは、ワクワクもする。だが実際に動き出せば、想定外の問題と抵抗の連続である。それを一つ一つ丁寧に解決し、すべてが整った状態を作り上げないかぎり、新しいことは成り立たない。夢を描いて人を巻き込んだ後には、責任を持ってやり遂げる日々が来る。圧倒的に多いのは、そのコツコツの時間のほうだ。そんなときにこそ、私はこの言葉を思い出す。

昭和の頃といまとで、いちばん違うのはインターネットの存在だろう。SNSで何千人ともつながれるし、分からないことはAIが調べて答えてくれる。実際、二週間前に思いついたビジネスのプロトタイプをすぐに作り、ユーザー体験を検証して、二週間で結果まで得られたことがある。そんなスピードの時代である。週に一つアイデアを試せば、一年で五十二個、二年で百個になる。打席に百回立てば、一回は当たるかもしれない。挑戦の回数を増やせる時代になったことは、本当に良い変化だと思う。

健康について言えば、良かった選択は山である。ワンダーフォーゲル部で自然のなかに身を置いたことは、体の芯を作ってくれた。悪かった選択は、酒だ。良くないと分かっているが、まだやめられずにいる。起業していると気がかりが多く、睡眠も足りていない。最近

は指輪型の計測端末で睡眠負債を測り、見える化して改善しようとしている。見えるようにすること。それが改善の第一歩である。

私は小さな頃から、死ぬことが怖かった。小学生の時分から、死んだらすべてが消えてしまうのではないかと恐れていた。就職で「」を選んだのも、情報技術の発展を通じて、人類全体の進化に何かを残せたら、死んでも何かが残るのではないかと考えたからである。息子が生まれてからは、未来を作るのは彼らだと思えるようになった。そしてその後、唯識思想という仏教の考え方に出会った。世界には自分と他者の境目がなく、すべてはひとつの存在であるという思想である。私は深く納得した。宮沢賢治の物語のなかに、死にゆく人へ「怖がらなくてもいい」と告げる場面がある。小学生の頃は不思議に感じられたあの言葉の背景に、この思想があると知ったとき、心が救われた気がした。いまの私は、死を恐れなくてもよいという考えを、静かに受け入れている。

私自身は戦争を知らない世代だが、母は戦争を経験している。祖父はシベリアに抑留され、帰国には大変な苦労があったと聞いた。満州での苦労話も、母からよく聞かされた。妻の母も戦争を知る人で、東日本大震災のとき、日本はどうなるのかと不安がる私たちに「空

襲の時はもっと大変だったのよ」と、意外なほど冷静に言った。あの世代の強さを見た気がした。もっとも、こうした話を聞いたのは私が年を取ってからで、戦争の記憶が私の価値観を根本から作ったわけではない。それは正直に書いておく。

「足るを知る」という言葉を、私は大切にしている。京都の寺で出会った言葉である。必要最小限のもので満足できることこそが、本当の豊かさだ。裕福な人たちと話す機会もあったが、彼らが必ずしも幸せそうには見えなかった。金と幸せは、必ずしも比例しない。健康で、幸せであること。家族とリラックスして食卓を囲むこと。それ以上のごちそうを、私はあの北アルプスのカレー以来、知らない。

子どもの頃おもちやが少なかったことも、中学の理不尽ないじめも、大人になったいまは、糧だったと思える。多少のことでは、ひどい状況だと感じなくなった。世の中にはもっとひどい状況がいくらでもあると、身をもって知っているからである。

遺すもの



人生でいちばん大切にしてきたことを問われたら、いまの私は、家族の幸せと答える。家族が元気で、無事に日々を過ごしてくれていること。それが何よりも大事である。

誇れる達成は何か。まだ完全には達成していないと思う。ただ、四十代後半で起業し、日本からインドへ、いまはアメリカでグローバルに戦っている。同じことを繰り返すのではなく、さまざまな角度から挑戦を続けて、勝ち筋を探している。道半ばだが、この挑戦を繰り返していること自体に、大きな意味があると思っている。

尊敬する人はたくさんいる。まずは父。「一を聞いて十をできるようにするより、何も言わずに一をできるようになるほうがいい」という教えを、私に刻んでくれた。妻の父の豊さんも素晴らしい人だった。家族が困らないように状況を整えてから、亡くなっていった。その姿勢を見習いたい。最近では、還暦を迎えてなお挑戦を続け、中東から五十一億円を調達した起業家の真田さんと仕事をしている。年を取ってからでも起業家として戦えることを、間近で見せてもらっている。会ったことはないが、六十八歳で新たな經典を作り、これからの十年を「I」に捧げると語る孫正義さんはロールモデルだし、七十歳で七十社の要職を務めた渋沢栄一の話は、いつも私を刺激する。パラレルアントレプレナーとして挑戦する生き方を、

私も目指したい。そして中村哲さん。アフガニスタンで用水路を拓き、人々の幸せに尽くしたその生き方は、やるべきことをやり続け、多くの人を巻き込んで幸せを築くという、私の目指す姿そのものである。

これからの望みは、仕事の面では、渋沢栄一のように七十歳になっても七十くらいの事業を起こし、世の中に価値を提供することだ。私は七十歳くらいまで働くかもしれない。やはり仕事がいちばん面白い。退職後には、家族と一緒に新しいことを始めたい。刈谷には、父が将来のためにと残してくれた土地がある。経済的に厳しかった時期、手放す寸前までだったが、なんとか守り抜いた。だからこそ、この土地を大事にしたい。そこに小さなカフェを建て、近所の子どもたちが集まって学び、体験できる場所を作る。家族で経営する、温かい場所を。父が遺してくれた土地を、次の世代に引き継いでいくのである。

日々の楽しみも書いておこう。最近、夜に息子と一緒に筋トレをするのが楽しみである。運動が大事だと分かっているながら実行できずにいた私は、息子が毎日腕立て伏せや筋トレをしていると聞き、相談してみた。すると「じゃあ一緒にやろうか」と言ってくれた。彼と一緒に、私も毎日続けられる。終わったあとに、互いに「ありがとう」と言い合う。た

だ体を動かす以上の喜びが、そこにはある。

息子が独立して家を出る日のことは、まだ経験していない。その日が来たら、やはり寂しいだろう。だがそれは、息子の大きな成長の一步でもある。そうなったら妻と二人、仲良く暮らしていこうかと思っている。そして最期のときには、息子に看取ってもらえたら幸せだ。

私は、息子のために頑張ってきた父親として覚えていてほしい。息子が私を思い出すとき、「お父さんがいてくれた」と感じてもらえれば——それで十分である。

神
谷
涉
三

語
り
手

わたしの物語 ―情景でたどる、ひとつの人生―

再編集スタイルA〔文芸私小説版〕

語り 神谷渉三

聞き書き・編集・造本 継ぐ (TSUGU)

発行 株式会社Imbesideyou

本書は同一のインタビューを三つのテイストで

再編集した検討用見本です。

無断複製・転載はご遠慮ください。